

勤勞作業考

著者	久木田, 賢志
雑誌名	龍南
巻	2 4 8
ページ	1 0 3 - 1 0 5
発行年	1941-02-25
その他の言語のタイトル	勤勞作業考
URL	http://hdl.handle.net/2298/8449

勤勞作業考

理三甲三 久木田賢志

夜氣に研がれ、朝風に磨られて鋭くなつた白牙の霜柱の間に、生まれた許りの緑の双葉が生の脈動を一杯に膨らませて覗き出てる。

その一つ／＼が美しい行列を敷いて水晶の様な日和の中に小さく光つて見える。

「生へたなア」

「ウン」

逞ましい茫漠とした鬚面が微笑む、中間施肥の生灰を両手の馬穴に入れて自分達の畑に集つた奉仕の級友数人は子供の様に而も嚴肅な感動にじつと佇んでゐた。

もう去年の夏の勤勞作業の貴い、自然の酬である。

空は鋼鐵を張つたかと凝つて動かず高遠一色ギラ／＼と光る太陽がじつと下界をねめつけて四圍はそよともせぬ六月の最中。
さなか

振りかぶる鍬がキラリと閃く。錯交した芝生の塊がぐいと剝がれる。逞ましい腕がヌツとそれを押す。跳ね返す土を浴び流れ落ちる汗を拳に受けて黙々としてモツコを運びシヨベルを押すその体軀には旺盛な實踐の意欲がはち切れんばかり漲つてゐる。

その間を老師が生徒と共にザルを持ち土塊を抱いて――師第一心、老若一体、理窟を超へ、批判を棄てた唯ひたむきの行動の欣びが溢れてゐた。

「學生は時局を辨へぬ」。「享樂的だ」「懷疑的だ」「否定的だ」抗辯の手段をもたぬ學徒への酷い風當りは時代の推移の煽りを喰つたジャーナリストの筆の好餌に供されて物凄しい嵐をまき起してゐた。學徒の十分の一を街の盛場で檢束し、遊戯場への出入を禁止し、酒を飲むな、葷を止め、いかめしい矢繼早の不可爲律の布告は果して學徒を肯定的にし、非享樂的にしたであらふか、學徒を萎縮せしめ、大人しく引込ませたかも知れない。然し一止振返つてその前に學徒は果して輕佻浮薄で、唯抽象的理念を欣び、實踐を欠いた觀念の遊戲に終始してゐたのであらふか。

敢へて云ひたい、世間は曇つた眼鏡で學徒を眺めてはゐなかつたか。

この黒土の中の優しい芽生を見よ、更に遡つて一昨年及び一昨々年の報仕作業を見よ。教授も生徒も數里の路をがたびくトラツクの上に振り落され相に掴まつて連日往復し乍ら炎熱の下を不平もなく、不満もなく、慣れぬ手に鋏を握り根株を裂いて曠野を墾いて行つた熱意は、その間事故一つ引き起さなかつた眞面目さは、最近漸く唱へ始められた師弟一如の實踐の嚆矢をなすものであり、時を得てか、獅子奮進の勇を具現する我等學徒の清淨にして燃ゆるが如き殷々たる鐘の響そのものではなかつたらうか。

而も前後三回何れの作業に於ても日頃缺席懈怠の點について注意を受けてゐた所謂怠け學生でも他の何人に劣らず働き、返つて他を誘導する程の活躍を見せてゐるのである。

既にしてその精華は皇軍の無敵を鼓舞し、皇國の永久を表象する我が空軍の基地として、日毎そこを飛び立つ銀翼の轟音に何人か感歎と讃嘆の胸を躍らせぬものがあ

らう。

斯る例は一つに我等龍南學徒のみではない。苟も皇國の到る處の學徒にも直ちに見られるのである。

これを以て世人猶學徒の一時の茶氣を以て彼等の夢生無爲を唱へるであらふか。

學徒を憂ひて爲すなき指導者に云はむ。

先づ青年學徒の承服し得る新しい理論を提供し、我等をして安んじて跟行し得る事態の眞實を徹底せしめよ。

更に我等の奮起し活動し得る天地を與へよ。必要とあらば今直ちにでも我等は一線に銃も把らむ。生産社會に槌も振らむ。學徒は既に立ち上つてゐる。新しい意欲に燃へて牡豹の精悍さで跳ね上らんとしてゐる。一部學徒の非行を發き能事終れりとせず、學徒の心を萎縮するに止る「ベカラス律」を並列する前に誠意と熱意を以て形式化せざる指導原理を明示せよ。

靜に勤勞作業を省みるに勤勞の汗の中に生れる和やわらみは人の心を温かくするものはない。卑近な例に日頃威嚴と權威に満ちた師の眞の味を如何に、共に働く時に味つた事か。團体的活動の眞價を知り、人間性と人間性の美し

い融合を勤勞の汗の中に如何に屢々感じた事か。將來指導的地位につかんとする學徒にして勞働に對する理解の缺除する者は全然指導者たるの價値に缺くる事は斷言して憚らない。勤勞に對する理解、それは各人が掌に豆をこしらへて始めて体得するものである。

この爲に強制も許されてよい。更に一社會人としての資格に一應團体的勤勞に参加する事を要める事は更に重要である。

何の爲に、或は又何が故に勞働の無經驗が社會人としての資格を欠き指導者としての價値を有しないのか。この愚問に對して自分は答へる。「人間が正しく生きてゐると云ふ事は勞働の所産である。」

新體制下に題す

文三甲一 後藤 松男

新体制、それは歴史的必然である——

おゝ悠久の彌榮の

紀元は二千六百一

正に時代の波荒れて

行く手嵐も哮れども

怒濤を衝いて堂々と

國歩ぞ進む日本の

その大理想仰ぐとき

名も新東亞建設の

使命ぞ擔ふ渾身に

若き血潮は脈搏ちて

或は逆り或は飛び

力となりて限りなく

湧きに湧きたつ青春の

希望よ意氣よ感激よ

はた情熱の火と燃えて

君が生命に我が胸に

漲るところ一億の

この澎湃の時の聲

聞け皇國に燐然と